

七高僧

②

天親菩薩

寺報五月号を間にはさんで
今月は寺報四月号に続き、七
高僧第二祖「天親菩薩」を紹
介したいと思います。

天親菩薩の略歴

天親菩薩は梵名をバヌバン
ズといい、天親と訳すのは旧
訳であって、新訳では世親と
訳します。(唐の玄奘以前の
訳を旧訳といい、以後を新訳
といいます。真宗では旧訳を
多く用いますので、天親を多
く用います)

出生年代はお釈迦さまお亡
くなり後九百年ごろという説
が多く用いられています。出
生地は北インドで兄弟は兄の
無著と弟の獅子覺の三人であっ
たと伝えられています。

兄の無著は大乗仏教を学び
悟りを開かれた方でしたが、
弟が大乗仏教をあまりに誇る
ことに胸をいたため、ある時、
重病にかこつけて弟を国によ
びよせ、弟に向かって「お前
のために心に重病をわずらっ
ている。お前は大乘を信じな
いどころか、これを誇ってい
る。それが苦になって命を全
うすることができない」と言
いました。これを聞いた弟は
兄の言葉に深く感じ入り、大
乗仏教の解説を兄に求めまし
た。

兄の解説を聞き、ここには
じめて大乘仏教の教説のすぐ
れていることを知り、それか
ら大乘仏教に転向しました。
大乘仏教を誇ったことを後
悔し、自分の舌をかみきって
その罪をつぐなおうとしまし
たが、兄は弟をいさめ、「舌
を切ってもその罪をほろぼす
ことはできない。もし罪をつ

くなおうと思うのならその舌
で大乘仏教を宣揚することだ
」といいました。その兄の言葉
を受け、天親菩薩は兄に大乘
仏教を学び、多くの書物を著
わして、大いにその宣揚と弘
教につとめました。

天親菩薩の著述・ 教義の發揮

浄土真宗の所依の聖典とし
て親鸞聖人は
無量寿経優婆塞提舎願生偈

『浄土論』の冒頭(一巻)

を選ばれています。

教義の發揮は

本願力・一心・願生

を明らかにされたことによ
う。

『浄土論』の冒頭(一巻)

世尊我一心帰命尽十方無碍
光如来願生安楽国
(世尊、我一心に尽十方無碍

光如来に帰命したてまつって、
安楽国に生ぜん(願す)
と世尊のお言葉に対し、二心
なく信じて阿弥陀如来(尽十
方無碍光如来)に帰依し、阿
弥陀さまの安楽国土に生れる
ことを願う、と、「一心」
「願生」を述べられています。
同じく『浄土論』の中で
仏の本願力を観するに、遇
ひて空しく過ぐる者なし、
速やかに功德の大宝海を満
足せしむ

と述べられて、一たび仏の本
願を聞信すると即時に無上の
大功德を得ることができると、
すなわち、「本願力」の
はたらきを明らかにして、救
いの力用(はたらき)をお示
しになりました。

親鸞聖人は「正信念」に

広由本願力回向

為度群生彰一心

(広く本願力の回向に由りて、
群生を度せむが為に一心を彰
す)

と「本願力」により私たちが
安楽国に救われていくために
「一心」が彰わされていると
天親菩薩の釈功をお述べです。

法語の世界

〈原 文〉

『嘆徳の文に 親鸞聖人と申せば その恐れあるゆゑに 祖師
聖人とよみ候 また開山聖人とよみまうすも おそれある子細
にて御入り候ふと云々。』

(『蓮如上人御一代記聞書 二百七十三』)

〈現代語訳〉

『嘆徳文に(親鸞聖人とあるのをそのまま朗読すると、実
名を口にすることになって恐れ多から(祖師聖人と読むので
ある。また(開山聖人と読む)ともあるが、これも同じく実名
でお呼びするのが恐れ多いからである)と仰せになりました。』

〈語句の解説〉

嘆徳文…… 存覚上人の著『報恩講嘆徳文』ともいう。親鸞
聖人の徳と法門を讃嘆されたもの。古来、覚如上
人の『報恩講私記』とともに、報恩講の時誦誦され
てきた。

境内地の 花 華

